

相容れない批判意識：『知の帝国主義：オリエンタリズムと中国像』と溝口雄三をめぐって

王, 晶
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/1430882>

出版情報：比較社会文化研究. 35, pp. 17-26, 2014-02-20. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

相容れない批判意識

—『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』と溝口雄三をめぐって—

オウ
王

ショウ
晶

はじめに

1980年代 P・A・コーエンの『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』と溝口雄三の『方法としての中国』二つの著書が相次いで出版される。この二つの著書は、中国近代史研究に関する従来の方法論を反省した上で新たな視点を模索するものとして注目される。従来の研究においては、この二つの著書は同じ性質のものとして共に取り上げられているが、相違点が指摘されていない。本稿では両著書が出版される背景を踏まえて、コーエンと微妙な差異がある溝口の批判意識を明らかにすることを目的とする。

1 『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』について

1-1 『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』の翻訳

近代中国政治思想史研究者佐藤慎一は、アメリカの中国近代史研究者 P・A・コーエンの *Discovering History in China: American Historical Writing on the Recent Chinese Past*¹ を翻訳して、1988年に『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』(以下『知の帝国主義』と略する) という題のもとに出版している。著者の P・A・コーエンは、1934年に生まれる。シカゴ大学を卒業し、1955年にハーヴァード大学大学院に入学し、当時中国研究の中心的指導者となるフェアバンクやシュオルツのもとで中国史を専攻する。1961年に1860年代のキリスト教布教に対する中国人の反応を分析した論文を執筆して博士号を授与される。代表的な著書として以下のものが挙げられる。

① *Between tradition and modernity: Wang T'ao and reform in late ch'ing china*, Harvard University Press, 1974.

② *Discovering History in china: American historical writing on the recent Chinese past*, Columbia University

Press, 1984.

③ *Fairbank Remembered*, Harvard University Press, 1992.

④ *History in three keys: the boxers as event, experience, and myth*, Columbia University Press, 1997.

以上取り上げた著書のいずれも中国語に訳されている。日本語に訳されているのは『知の帝国主義』だけである。

『知の帝国主義』において、コーエンはアメリカにおける従来の中国近代史研究方法を、「西洋の衝撃と中国の反応」アプローチ、「伝統と近代化」アプローチ、「帝国主義」アプローチの三つに分け、いずれも西洋中心の見方に由来する歪みという深刻な問題があると指摘する。そして西洋中心の歪みを最小限に減らして中国近代史を見直そうとする。その試みとして、コーエンは「中国自身に即する」アプローチ (China-centered approach) を主張する。

本書は1984年に出版されるが、4年後に佐藤慎一によって日本語版が出版される。以下では、佐藤がこの著書を翻訳するに至った経緯に触れてみたい。

佐藤慎一は1969年に東京大学法学部を卒業し、その後近代中国政治思想史を専攻する。1973年4月東北大学法学部比較政治学担当の助教授となる。1979年から1981年までカリフォルニア大学バークレー校客員研究員として2年間アメリカに滞在した。佐藤は1970年代のアメリカの中国研究の発展に衝撃を受ける。これがきっかけとなって、P・A・コーエンの *Discovering History in China: American Historical Writing on the Recent Chinese Past* を翻訳したと考えられる。これまで方法論に関しては述べることの少なかった佐藤慎一は、中国研究の枠組みについて主に検討するこの著書を翻訳したことから、本書に強く引き付けられたことがうかがえる。

アメリカで体験した中国研究について1982年に「アメリカの中国研究」を書いている。その中で「近現代中国の研究 (1970年以降のアメリカの中国研究のこと—筆者

による)では、日本の研究よりハッキリまさっていると思う²と述べている。1970年代のアメリカの中国研究に触発されて方法論について検討するようになったことは明らかであろう。しかし、当時佐藤の見方と反対の立場を取る人もいる。中国思想史研究者の河田悌一³はその一人である。河田は1980年にアメリカに渡り、1981年に「アメリカの中国研究」を書いている。佐藤と同じ時期にアメリカに行って、また同じタイトルの論文を書いているが、二人の体験はかなり異なる。佐藤がアメリカの中国研究に対して高い評価を与えるのに対して、河田は「近現代中国の研究では、日本の研究にまさるとも劣らぬところにまできているのではないのでしょうか⁴」と言っている。さらに『知の帝国主義』に対する書評において「アメリカの中国研究が成長し、成人に達した⁵」と述べていることから、河田は佐藤ほどアメリカの中国研究に共感せず、それを日本の中国研究に取り入れる必要性も感じていないことが分かる。ここから当時新方法の誕生を皆同じように感じているわけではないという背景が浮かび上がってくる。

1982年に「アメリカの中国研究」を書くまで、佐藤の手になる中国研究方法を問題とする専門著書あるいは論文は、管見のかぎり見つからない。6年後の1988年にアメリカの中国研究者P・A・コーエンの*Discovering History in China: American Historical Writing on the Recent Chinese Past*を翻訳して『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』という題で出版している。これは中国語版の林同奇訳『在中国発見歴史』(1989年 中華書局)よりも早い。佐藤は、アメリカの中国研究に触発されて、中国研究方法論問題に目を向けるようになり、さらにコーエンの著書をいち早く訳すまでになったことから、アメリカの中国研究に大いに刺激されたことが分かる。

1-2 日本語版の出版による反響

『知の帝国主義』の出版は、歴史研究者や思想史研究者たちの議論を引き起こした。まず書評は5篇もある⁶。書評は、主にコーエンの著書の内容および特色を紹介しながら、十分ではないところを指摘している。訳者による周到な注釈や解説を高く評価しているものもある。書評は著者と著作をめぐって書かれている。ほかに、コーエンの説を溝口雄三とともに挙げて論じているものもある。佐藤一樹は「近代中国研究と「西洋」:ポール・コーエン『知の帝国主義』をめぐって」において、「従来の研究枠組みと新たな動きを詳細かつ明快にまとめた本書が刊行されたことは、日本での新たな枠組みに関する議論の活発化、問題点の発見のためにも非常に有意義であると

考える⁷と評価して、「コーエンと溝口が示す新たな研究枠組みをめぐる両氏の問題提起のおかげで、今日の近代中国研究、とりわけ思想史研究のもつ課題は、ある程度明らかにすることができた⁸と述べている。その他、並木頼寿の「コーエン『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』」(長崎暢子 山内昌之編『現代アジア論の名著』中央公論社 1992年)も挙げられる。

溝口も『知の帝国主義』に言及している。管見の限りその言及は二箇所である。一回は、「「タダの鲁迅」と「私」の対話—尾上兼英著『鲁迅私論』によせて—」(『中国研究月報』486号 1988年8月)においてである。前章で検討したように、溝口は本文より訳者あとがきの中の「タダの中国」という言葉に注目して引用する。具体的には以下のとおりである⁹。

中華人民共和国の成立以来の40年を区分してみると「(イ) 建国から文革開始1966年までの十数年、(ロ) 76年四人組逮捕までの文革の10年、(ハ) それ以後現在までの十余年、の三つに分けられそうである。この三つをかりに、(イ)「新」中国の時期、(ロ) 中国が「新」を脱いだ時期、(ハ) タダの中国となった時期、とよんでおこう¹⁰。(引用文の下線は筆者によるもの。以下も同様。)

原文における意味と同じように、文化大革命が終わってから1988年までの十数年を指す時期の区分として「タダの中国」を溝口は使っている。

もう一回は、『方法としての中国』(東京大学出版会 1989年)に収録された「<儒教ルネサンス>に際して」においてである。

ちかごろ欧米における儒教の再評価が話題になる。このこと背景には、一つには東アジア世界とくに日本、韓国、台湾の急速な経済成長に対する欧米の側からの注目と、もう一つにはオリエンタリズム論争やコーエン『知の帝国主義』にみられるヨーロッパの自己相対化—アジアへの優越意識に対する自己批判がある¹¹。

『知の帝国主義』に対する溝口の捉え方が明らかである。つまり、『知の帝国主義』をヨーロッパの自己相対化、言い換えればヨーロッパ中心主義に対する自己批判として捉えているが、それ以上触れることはなかった。彼の関心は欧米の儒教再評価の潮流に乗るアジアの儒教ルネサンスに警鐘を鳴らすことにある。

現時点でのわれわれの課題は、むしろ「ルネサンス」を外化し、欧米の自前性に対抗できる自前性、すなわちわが国の資本主義のやみ雲な発展が持っている反道徳性（例えば東南アジアの森林乱伐）などを、いかに正しく自己検討できるかであろう。欧米追隨の裏返しの「儒教文化」自尊の「ルネサンス」などはこの際、願い下げてもらいたいものである¹²。

欧米の儒教再評価の潮流に乗ることより、「欧米の自前性」、つまり自己反省によって儒教の再評価に至るメカニズムを溝口は重要視する。『知の帝国主義』は彼にとってそのメカニズムを見抜くための手がかりである。ただ『知の帝国主義』に二回も言及しているものの、いずれの場合も本文の内容に触れることはなかった。

2 新たな研究方法論の呼びかけ

1976年に中国の文化大革命が終焉を迎えるに至って、それが大きな災難であったことが明らかとなり、文革を賛美した中国研究者たちは挫折を感じざるを得ない事態となった。文革の挫折により、従来の中国認識を見直すことが迫られる。こうした背景をもとに、日本の中国思想史研究分野において、1980年代から近現代中国を研究する方法論に関する新たな検討が現れはじめる。本節では佐藤慎一と溝口雄三をめぐって検討したい。

1987年に佐藤は東京大学文学部に移って溝口と同僚となり、1987年から1993年まで、6年間共に東京大学文学部にいた。この間、1988年に佐藤訳の『知の帝国主義』が出版される。1989年に溝口の『方法としての中国』が出版される。このほかに、1993年から刊行される溝口雄三・浜下武志・平石直昭・宮嶋博史編『アジアから考える』全7巻¹³の第5巻『近代化像』に佐藤の「近代中国の体制構想」¹⁴が収録されている。

佐藤は『知の帝国主義』の訳者あとがきにおいて次のように述べている。

グローバルに見て、中国近代史研究は新たな段階にさしかかっている。第一に、中国近代史研究の主たる生産国は中国・アメリカ・日本だが、中国（と日本）の場合であれば文化大革命の挫折、アメリカの場合であればヴェトナム戦争の挫折と、いずれも従来の認識枠組みの根本的再検討を迫る体験をしたばかりである。第二に、文化大革命以後の中国で、洪水とも言えるような勢いでおびただしい史料の公刊がなされ、従来の枠組みでは説明できない新事実

が次々に浮かび上がってきた。つまり、従来の研究の批判的再検討と膨大な新史料とを踏まえた中国近代史研究が、アメリカのみならず、日本でも中国でも、同様に求められているわけである。（中略）コーエンがアメリカの中国研究者に突き付けた問題は、決して他人事ではない。私たちはどのような前提にもとづいて中国研究を行ってきたのか、私たちの中国研究も「アウトサイダー」性の十分な自覚を欠いていたのではないか、今後の研究戦略は如何にあるべきか等、日本の中国研究に即して私たちがみずから考えなくてはならない問題は決して少なくないはずである¹⁵。

19世紀後半より西洋モデルを採用する過程において生じる中国人の思想的変化について、佐藤が主張するのは、中国の知識人が単なる西洋模倣でも反発でもない態度をもって、西洋と向き合うことである。具体的にはこのように述べている。

中国が新たに何かを導入しようとする際、それと類似のものを中国の過去の歴史の中に再発見し、「真なるもの」と「自己なるもの」を一致させ、それによって導入を正当化することは、1860年代に西洋の機械・技術の導入を開始した際にまず行われ、以降も様々な附会のバリエーションが展開されてきた¹⁶。

附会の論理を強調する背景には「近代中国の対外関係の歴史を全て帝国主義の侵略と中国人民の抵抗という図式で割り切る見方に対する反発が基底にあった」¹⁷と佐藤自身は述懐している。

附会の論理について、コーエンも言及している。『知の帝国主義』第一章「西洋の衝撃—中国の反応」にまつわる問題」において、附会論的発想として戊戌変法の前後の時期に流行した改革正当化論、つまり、西洋の学問の源流が実は中国にあるという主張が取り上げられている。具体的な例として、張之洞（1837—1909）が1898年に著した「中学為体、西学為用」（中国の学問を根本的な原則とし、西洋の学問を実際的な応用に役立てる）という一文による「体用論」が取り上げられている¹⁸。

こうした附会論的発想が果たした機能をコーエンは三つにまとめている。第一に、中国の文化的誇りを傷つけることなく、西洋に倣った変革を正当化することができた。第二に、中国人は人種としては決して西洋人より知的に劣っていないということを、中国人に対しあらためて保証した。そして第三に、ものごとの正当性の根拠を

古代に求めるといふ、中国人の一般的な好みを満たすことができたのである。¹⁹

佐藤は万国公法の翻訳と刊行²⁰の経緯を通して、西洋と向き合うに際して、中国人は単なる西洋模倣でも反発でもなく、自らの規則に従っていたことを強調する。附会の方法によって、万国公法と中国の経書や史書を対照し、万国公法のある箇条が春秋時代に実行されていたことが文献的に実証され、受容すべき西洋のものがすでに中国文明に備わっていたことが示されてはじめて、規範として中国人に受け入れられるようになった過程を佐藤は確認した。19世紀後半から20世紀初頭にかけての近代中国において、西洋モデルは中国文明を超える固有の価値をもつものとして自立するのではなく、当時の知識人は中国自身の論理つまり附会の論理をもって西洋モデルとの関係进行处理していたと佐藤は指摘する。佐藤は附会の論理を通して「近代中国の対外関係の歴史を全て帝国主義の侵略と中国人民の抵抗という図式で割り切る見方」に異議を唱えたのである。

一方、溝口は「近代中国像の再検討」において最初から新しい方法論を模索する必要があると主張している。

中国研究は80年代以来、急角度の転回をとげつつある。中国の変化は、日中関係の変化という要因ももちろん大きいですが、冷戦構造の溶融を因として果ともするアジアの政治・経済関係上の枠組みの変化、それらに応じての、進歩—保守、社会主義—資本主義、先進—後進という単純二元論の構図の崩壊という変化がもう一つの大きい要因としてあげられる。歴史学が現在の中に未来を析出し、あるいは過去を現在の批判形として再生させることを一つの役割としているとすれば、6、70年代の方法論ではもはやその役割が果たせなくなっている、と多くの人が感じているということである。戦後以来の一歴史観・世界観の実践でもあるところの一方法論を再吟味し、現在のための方法論を模索、確立することが必要となっている²¹。

従来の方法論の再検討の実践として、溝口は中国近代史研究における段階論的構図—中国の近代過程は洋務—変法—革命といった段階論—に異議を唱える。洋務運動は日清戦争の敗北によって挫折し、代わって立憲君主制を企図した康有為・梁啓超らいわゆる変法派が台頭し、戊戌新政を試みるが、西太后のクーデターによってわずか百日で失敗する。結局、章炳麟や孫文らの革命派が満州王朝を倒すというのが中国近代化過程に関する通説である。溝口はそうした見方を「保守反動から進歩への段

階論²²と捉え強く批判する。その代わりに、地方の開発、開明化および充実—学校、水利、商務、農事、工業—といった社会経済史的考察を踏まえて、「洋務・変法とも足並みは完全にそろっていた²³と指摘する。また、辛亥革命において省紳層が果たした役割は見逃せないとされ²⁴、洋務—変法—革命の間の連続性を強調して、従来の保守から進歩へという構図を超えようとした。

佐藤と溝口は一致して方法論の転換を呼びかける。佐藤の附会論と溝口の地方の力を重視する視点は、いずれも革命究極認識に異議を唱えたものである。ただ佐藤はアメリカの中国研究に刺激されるところが多いが、それに対して溝口はアメリカの中国研究にそれほど関心を寄せないという違いがある。

3 『知の帝国主義』と溝口雄三の位置づけ

3-1 キーワード翻訳における選択

*Discovering History in China: American Historical Writing on the Recent Chinese Past*の日本語版と中国語版を比べてみれば、本書の重点となる第4章“Toward a China-Centered History of China”におけるキーワードの翻訳が異なっていることが分かる。本節ではその相違を手がかりに、佐藤の翻訳における考慮について検討してみたい。以下では、英文の目次を挙げ、また中国語版の目次と日本語版の目次をそれぞれ挙げて比較してみる。

英文目次²⁵

Contents

Preface to the Second Paperback Edition	ix
Preface	xxix
Introduction to the 2010 Reissue	xxxix
Introduction	1
1. The Problem with “China’s Response to the West”	9
2. Moving Beyond “Tradition and Modernity”	57
3. Imperialism: Reality or Myth?	97
4. Toward a China-Centered History of China	149
Notes	199
Index	229

コーエンは第1章から第3章までは従来の中国研究の枠組みを顧みて、第4章において1970年代からの中国研究者たちによる研究をまとめて、それを新たな傾向、つまり“China-Centered”と名づけている。本章はコーエンが最も強調したい部分ともなる。

中国語版目次²⁶

目 录

中文版前言 1
 “中国中心观”:特点、思潮、与内在张力(译者代序)..... 5
 前言 41
 序言 53

第一章 “中国对西方之回应”症结何在? 1
 第二章 超越“传统与近代” 54
 第三章 帝国主义:是现实还是神话? 106
 第四章 走向以中国为中心的中国史 166

作者姓名汉译表 227

日本語版目次²⁷

目 次

日本語版への序文 5
 凡例 8
 はじめに 11

序章 26

第一章 「西洋の衝撃―中国の反応」にまつわる問題 38

第一節 理論的諸問題 41
 第二節 反乱 47
 第三節 改革 52
 第四節 反動 76
 第五節 アプローチの修正 91

第二章 「伝統と近代性」を越えて 98

第一節 十九世紀西洋の中国観 100

第一節 ジョセフ・レベンソンと一九五〇年代・六〇年代の中国研究 103
 第二節 伝統と近代性は対極に立つのか 126
 第三節 「近代化」パラダイムの廃棄を目指して 142
 第三章 「帝国主義」――神話が現実か 150
 第一節 イデオロギーとしての近代化論 151
 第二節 ヴェトナム戦争と中国研究 159
 第三節 ウォラーステイン理論と中国 170
 第四節 象にとまった蚤 188
 第五節 帝国主義概念の再検討 209

第四章 中国研究の新たな潮流 220

第一節 知の帝国主義 221
 第二節 「中国自身に即した」アプローチの誕生とその特色 226
 内発的变化の重視 地域や地方の重視 基層社会の重視 社会科学の影響
 第三節 一八四〇年を越えて 266
 訳者あとがき 283
 注 332
 文献一覧 309

第4章のタイトルおよび節の見出しの翻訳において異なるところを取りあげて表を作ってみれば次のようになる。

	原文	中国語訳	日本語訳
第4章のタイトル	Toward a China-Centered History of China	走向以中国為中心的中国史	中国研究の新たな潮流
第2節の見出し	Centering Chinese History in China	把中国的中心放在中国	「中国自身に即した」アプローチの誕生とその特色
第3節の見出し	The China-Centered Approach: Implications and Consequences	中国中心主義:其含意及後果	1840年を越えて

佐藤訳日本語版は章のタイトルの翻訳において原文そのままの直訳より「新たな潮流」という点を強調していることは分かる。そして第二節のタイトルにおいて、新たな潮流となる“China-Centered”というキーワードを「中国自身に即した」と訳している。中国語版は原文そのままの「以中国为中心」(中国を中心にという意味―筆者による)と直訳している。しかし日本語版はそうではない。この点について、佐藤は訳者あとがきにおいて次のように述べている。

原文はChina-centered approach である。直訳すれば「中国を中心に据えた」アプローチとでもなるのだろうが、西洋の基準を外在的に持ち込まず、あくまで対象に即して中国史を捉えようとする態度を指して、コーエンはこの言葉を用いるので、本書ではあえて「中国自身に即した」アプローチという訳語を用いる²⁹。

訳者は原文の意味を変えず、それを尊重したうえでこうした考慮をしたことが分かる。その訳は、

1980年代中国自身の独自性に即して近代中国を見直すとする溝口の主張と非常に相似している。

1980年から1981年にかけて、溝口は「『中国の近代』をみる視点」を雑誌『UP』に連載する。その中で「中国内視点」³⁰に立って、近代中国を客観的に捉えることを目指す。具体的には「公」思想の継承を取り上げて、前近代と近代の連続性を強調する。溝口によれば、清末の孫文の「三民主義」から毛沢東革命思想—「公」思想をプロレタリア的に発展させた—へと継承され、それは明末清初の時期の戴震(1723-1777)に淵源づけられるとされる。それに基づいて溝口はみずからの方法論を打ち出す。「中国の近代はほかならぬそれ自身の前近代をあらかじめ母胎としており、したがってそれは中国の前近代の歴史的独自性をみずからの内に継承するものである」³¹。「今後わたくしたちがアジアの近代を考えるには、日本にせよ中国にせよ、それ自体の前近代に基づいたそれぞれの異ヨーロッパ的独自性に即して考える必要がある」³²。

“China-Centered” Approachの翻訳に際して佐藤は「中国を中心に据えた」より「中国自身に即した」を選んだ。その結果、「中国自身に即した」アプローチと溝口の「中国自身の独自性に即する」主張とは非常に接近する。その結果、コーエンと溝口は内発的変化を重要視する同志として連想されやすいようになる。

1988年に佐藤の訳書『知の帝国主義』が出版される前後のできごとをあげてみれば、二つのことがあげられる。1987年に佐藤は東大文学部に移って溝口と同僚になったこと、1989年に溝口の『方法としての中国』が出版されことである。こうした背景を踏まえてみれば、佐藤の翻訳における選択は意図的ではないかと考えられる。そうした選択を通じて、溝口の「中国内視点」と相俟って、方法論の転換に関する議論の活性化を目指したのではないかと考えられる。『知の帝国主義』の翻訳出版は溝口の「中国内視点」の位置づけに変化をもたらしたことは明瞭である。次節ではそれについて検討する。

3-2 『知の帝国主義』と溝口雄三の位置づけの変化

『知の帝国主義』と『方法としての中国』が相次いで出版されるにともなって、中国自身に即する視点が話題となる。そして1988年6月『知の帝国主義』の出版と前後して、中国研究者たちによる溝口の主張に対する態度には変化が見られる。反対から次第に評価へと向かっていくのである。そうした移行を1988年6月『知の帝国主義』の出版を境にして変化していく溝口の方法論に対する評価と対比しながら、考察する。

『方法としての中国』は溝口の1980年代に書かれた12篇の論文を収録してできた書である³³。その中の8篇は1988年6月まで発表されている。その8篇の中で次の3篇が議論されている。

- ①「『中国の近代』をみる視点」『UP』1980年～1981年
- ②「近代中国像は歪んでいないか」『歴史と社会』2号 1983年
- ③「ふたたび〈近代中国像〉をめぐって」『史潮』新19号 1986年7月

②「近代中国像は歪んでいないか」に対して、1985年に久保田文次は「近代中国像は歪んでいるか—溝口雄三氏の洋務運動史理解に対して—」を書いて、「洋務運動が「事実への無視と歪曲」「偏見」によって歪められてきたという溝口氏の基本的な論旨にはまったく承伏できない」³⁴と反論している。

①「『中国の近代』をみる視点」と③「ふたたび〈近代中国像〉をめぐって」について、杉山文彦は1988年3月に発表されている「近代中国像の『歪み』をめぐって—溝口雄三氏の『中国基体論』について—」において、「各文明はそれぞれ独自のものであって、その間に先進後進の関係は成り立たないとして、ヨーロッパの物差しを軸として近代中国史を見ることを全面的に否定し、それにかえての「中国基体論」の提唱となると、その先には何やらかつてのアジア主義のようなものが見えてきて、強い異和感を持たざるを得ない」³⁵と批判している。

しかし『知の帝国主義』の出版後、溝口の方法論は否定的な評価だけではなく、コーエンと共に挙げられることで、積極的な意義が認められるようになる。

佐藤一樹は「近代中国研究と「西洋」:ポール・コーエン『知の帝国主義』をめぐって」において「コーエンと溝口が示す新たな研究枠組みをめぐる両氏の問題提起のおかげで、今日の近代中国研究、とりわけ思想史研究のもつ課題は、ある程度明らかにすることができたと考える。(中略) 新たな研究の枠組みについてはまだまだ検討されるべき試案さえ出そろっておらず、今後の活発なる議論に期待せねばならない」³⁶と述べている。

そのほか、並木頼寿は「コーエン『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』」において、「コーエンの本書は、オリエンタリズムを批判して中国に即した歴史の発見を提唱した。その流れの中で、アヘン戦争以前、明清時代からの中国社会の内発的な変容の追跡に精力が注がれている。アヘン戦争による歴史の断絶を批判する立場からすれば、このような研究動向は当然あるべき姿かもしれない。しかし、そこに発見されるべき中国社会の独

自の歴史的発展とはどのようなものなのであろうか。そしてさらに、中国社会の特質を精緻に解明することのなかから、いかなる普遍的視野が開かれるか、それが自国史、外国史を問わず、われわれの大きな課題ではなからうか³⁷と述べている。この書評において溝口の『方法としての中国』は参考文献として取り上げられているが、直接言及されることはなかった。翌年の1993年に書かれた「日本における中国近代史研究の動向」(小島晋治・並木頼寿編『近代中国研究案内』岩波書店)において、1980年代の思想史分野で中国近代史像の転換を敢行した人として溝口は取り上げられている。ただし並木は中国社会の独自の歴史的な発展という研究動向を警戒している。

『知の帝国主義』の出版は、溝口の「中国内視点」の革新性が受け入れられることに貢献したと言えよう。だが、それによって溝口の主張は、西洋中心主義批判と安易に見なされ、コーエンと同じ性質のもののように捉えられる。それによって、西洋中心主義と微妙な差異がある溝口の批判意識が見落とされることになったのである。

3-3 問題意識の違い

コーエンと比べれば、溝口が中国自身に即する視点を主張するのは、優劣価値観を批判するためである。欧米近代化を早く実現したことに優越感をもつ考え方、および日中両国の近代化過程に存在する構造的な差異を優劣の差異とする見方との戦いである。そこから竹内好に対する批判が出てくる。「中国の近代」をみる視点」において溝口は、竹内好による抵抗の近代中国像および自己を保持する回心型という中国像をまず批判する。それは客観的な中国像ではなく、「自己否定的な憧憬構造」によるものであり、「徹頭徹尾日本的近代の反措定」となるとされる。つまり、「抵抗」や「回心」といった構造をヨーロッパ近代化の超克として優位にすることに溝口は反対する。同時に欧米の近代化を早く実現したことに優越感をもつ考えにも反対するのである。優劣価値観を批判するからこそ、自然態のもとで内部から発生する中国思想史の原動力をとりわけ重要視し、西洋からの衝撃を考慮に入れない。

思想史からみていえることは、17世紀から20世紀にかけてこの300年の儒教的イデーつまり理は、存人欲的天理(王夫之)ーコモンウェルスの仁(戴震)ー公理・大同(章・譚・康・孫ら)³⁸と展開するが、この間に公を内部から崩す形での私の主張は一切なく、しかも現実に革命思想は公理・大同の三民主義から共産党の人民民主

義まで、多数を公とし、少数を私とする公革命思想で一貫している³⁹と唱え、近代における中国革命を前近代の理観の歴史的発展の結果と見なしている。西洋の衝撃は「日本と中国について言うかぎり、前近代以来の構造を破壊したり崩壊させたりするものではなく、たんにそれぞれの前近代の脱皮を促成した、ただしその力あまってやや変形をもたらした、という程度のものであった」⁴⁰とされる。

それに対してコーエンの“China-centered” approachは、西洋の衝撃に対する中国の反応の複雑さを示そうとする。コーエンは自分自身を含めた多くの中国研究者を取り上げ、1970年代から台頭する新たな中国研究の潮流を“China-centered” approachと名づける。だが、実際に1970年代のアメリカの中国研究の傾向は、多岐にわたり、一つにまとまった方法論にはなっていない。コーエンはあえて一つの新たな傾向としてまとめようとする。そして、その潮流の四つの特徴として、①内発的变化の重視 ②地域や地方の重視 ③基礎社会の重視 ④社会科学の影響 を抽出している。

19世紀の中国における改革、変法、革命をもっぱら西洋に対する反応ではなく中国内部から発生した問題として捉えようとする動きを、コーエンは内発的变化を重視する特徴としてあげている。コーエンは自分自身の王韜に関する研究を取り上げて説明する。「王韜は1870年代・80年代における代表的な西洋通であり、かつ西洋流の改革の鼓吹者であったが、彼が社会問題や政治問題に対する批判的関心から改革論をはじめて唱えたのは60年代のことであった。つまり、彼の改革論は西洋に対する反応ではなく、太平天国の反乱に対する反応として開始されたのである」⁴¹。他にスーザン・マン・ショーンズやフィリップ・クーンの研究も取り上げている。「洪亮吉(1746-1809)が1793年に人口増加の影響について論じて、その時点で中国人が関心を持った問題は、当然のことながら徹頭徹尾中国国内の問題であった。その後西洋の脅威に対する海防の問題は、徐々に中国人の問題関心の一部を占めるようになったが、その程度はきわめて限られたものであった。19世紀の前半に著作活動を展開した龔自珍(1792-1841)の場合は、西洋の脅威を意識し、それについての意見も述べているが、彼の主たる危機意識の対象は、中国人の政治的・社会的モラルの衰退現象にあった」⁴²。これだけでなく他にも取り上げられているが、これ以上は触れないこととする。

残りの三つの特徴ー②地域や地方の重視 ③基礎社会の重視 ④社会科学の影響ーについて、コーエンは、地域的ないし地方的偏差を重視する研究を取り上げ、「沿海」と「内陸」、もしくは省レベルと県レベルに分けた研

究を取り上げている。省レベルの研究テーマ、例えば「19世紀中葉の広東省における社会秩序の混乱」、「清末の山東省におけるドイツ帝国主義」、「1911年から1927年に至る湖南省の農民革命」などが挙げられている。県レベルの研究として明代・清代の安徽省桐城県の地方エリートに関する研究を行ったヒラリー・ビーティーが挙げられている⁴³。その他に、清代の教育と民衆の読み書き能力に関するエヴェリン・サカキダ・ロウスキーなどの研究が取り上げられている。民間宗教と民衆反乱について研究するダニエル・オーバーマイヤーとスーザン・ネイクインなどの基礎社会を重視する研究が挙げられている。文化人類学のような社会科学の諸分野の手法を摂取して、エリートだけに限定するのではなく、庶民が生きる社会基層から問題を捉えようとする傾向をコーエンは重視している。

要するに、コーエンの“China-centered” approachは西洋衝撃による中国反応の複雑さを示そうとしたのである。コーエンと比べれば、溝口の関心は何よりも優劣価値観に囚われず中国史の自然態を探索することにあると言える。

おわりに

『知の帝国主義』においてコーエンが主張する「中国自身に即する」(China-Centered) アプローチは、1978年に出版されたエドワード・サイードの *Orientalism* の影響も背景にあって、西洋中心的な知に対する批判となる。こうした流れの中で、溝口の方法論の革新性が注目されはじめるが、安易に西洋中心主義批判のほうに分けられ、コーエンと同じ性質のもののように捉えられた。西洋中心主義批判と微妙な差異がある溝口の優劣価値観に対する批判意識は見落とされた。つまり、欧米近代化を開始した時間的な早さを優劣の軸とする考え方、日中両国の近代化過程の構造的な差異を優劣の差異として解釈する見方、そうした固定化された認識に捕らえられて乗り越えられない状態を改善しようとする溝口の試みは取り上げられることはなかった。

参考文献

- ¹ Columbia University Press, 1984.
- ² 佐藤慎一「アメリカの中国研究」『創文』223号 1982年 5頁。
- ³ 1945年—。中国哲学研究者。著書『中国近代思想と現代—知的状況を考える』(研文出版 1987年)等。
- ⁴ 河田悌一「アメリカの中国研究」『創文』9月号 1981年 15頁。

- ⁵ 河田悌一「書評『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』」『思想』6月号 1989年 162頁。
- ⁶ 詳細は次のようである。
 - ①並木頼寿「『知の帝国主義』を読んで」『中国研究月報』485 1988年。
 - ②張士陽「ポール・A・コーエン著/佐藤慎一訳『知の帝国主義』」『史學雑誌』97 1988年。
 - ③井尻秀憲 書評「P.コーエン著 佐藤慎一訳『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』」『国際問題』345 1988年。
 - ④河田悌一 書評「『知の帝国主義』」『思想』6月号 1989年。
 - ⑤今沢紀子 書評「P.A.コーエン著 佐藤慎一訳『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』」『歴史学研究』595 1989年。
- ⁷ 佐藤一樹「近代中国研究と「西洋」：ポール・コーエン『知の帝国主義』をめぐって」『中国文化：研究と教育：漢文学会会報』47 1989年 67頁。
- ⁸ 同上 74頁。
- ⁹ 前章で既に引用しているが、分かりやすく説明するために、ここでもう一回引用する。
- ¹⁰ 溝口雄三「「タダの魯迅」と「私」の対話—尾上兼英著『魯迅私論』によせて—」『中国研究月報』486号 1988年 33頁。
- ¹¹ 溝口雄三「<儒教ルネサンス>に際して」『方法としての中国』東京大学出版会 1989年 174頁。
- ¹² 同注11。
- ¹³ 7巻それぞれは、①『交錯するアジア』②『地域システム』③『周縁からの歴史』④『社会と国家』⑤『近代化像』⑥『長期社会変動』⑦『世界像の形成』 東京大学出版会 1993年～1994年。
- ¹⁴ 後に佐藤慎一『近代中国の知識人と文明』東京大学出版会 1996年 所収。
などがあげられる。以上取り上げた著書のいずれも中国語に訳されている。日本語に訳されているのは『知の帝国主義』しかない。
- ¹⁵ 『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』訳者あとがき290-291頁。
- ¹⁶ 佐藤慎一「「文明」と「万国公法」—近代中国における国際法受容の一側面—」『近代中国の知識人と文明』東京大学出版会 1996年 198頁。初出：祖川武夫編『国際政治思想と対外意識』創文社 1977年。
- ¹⁷ 佐藤慎一『近代中国の知識人と文明』あとがき 東京大学出版会 1996年 359頁。
- ¹⁸ P・A・コーエン『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』平凡社 1988年 63-64頁。

- ¹⁹ 同注18 64-65頁。
- ²⁰ アメリカ人宣教師ウィリアム・マーティン (William Martin, 中国名・丁韞良, 1827-1916) が、ホイートン (1785-1848) の著作 *Elements of International Law* を中国語に訳して『万国公法』という題名のもとに1864年に刊行した。
- ²¹ 溝口雄三「近代中国像の再検討」『方法としての中国』東京大学出版会 1989年 35頁。
- ²² 溝口雄三「近代中国像は歪んでいないか—洋務と民権および中体西用と儒教—」『方法としての中国』東京大学出版会 1989年 200頁。
- ²³ 同注22 217頁。
- ²⁴ 同注22 219頁。
- ²⁵ P・A・Cohen, *Discovering History in China : American historical writing on the recent Chinese past*, Columbia University Press, 2010.
- ²⁶ 林同奇訳『在中国発見歴史』中華書局 1989年。
- ²⁷ 佐藤慎一訳『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』平凡社 1988年。
- ²⁸ P・A・コーエン『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』平凡社 1988年 224頁。
- ²⁹ 溝口雄三「中国の近代」をみる視点(四)『UP』99号 1981年 31頁。
- ³⁰ 溝口雄三「中国の近代」をみる視点(二)『UP』97号 1980年 10頁。
- ³¹ 同注29 30頁。
- ³² 具体的には以下の12篇である。
- ①「中国の近代」をみる視点『UP』1980年～1981年。
 ②「近代中国像は歪んでいないか」『歴史と社会』2号 1983年5月。③「ふたたび近代中国像」をめぐって『史潮』新19号 1986年7月(『方法としての中国』に再録するとき「近代中国像の再検討」と題名を変えている)。
 ④「ある反「洋務」」『伊藤漱平退官記念論文集』1986年3月。⑤「天下と国家、生民と国民」『歴史学研究』553号 1986年4月。⑥「方法としての中国」『UP』1987年1月号。⑦「津田シナ学とこれからの中国学」『津田左右吉全集』(第二次)第18、19巻 1988年2-3月。⑧「いま儒教ルネサンスをどう考えるか」『空潭』1 1988年1月。⑨「儒教と近代および現代」『読売新聞』1988年10月。⑩「日本の宋明学研究と中国の宋明学研究」『空潭』2 1988年12月。⑪「儒教資本主義と儒教社会主義」『UP』1989年1月号。⑫「中国における「封建」と近代」『文明研究』7号 1989年3月。
- ³³ 久保田文次「近代中国像は歪んでいるか—溝口雄三氏の洋務運動史理解に対して—」『史潮』新16号 1985年 68頁。
- ³⁴ 杉山文彦「近代中国像の『歪み』をめぐって—溝口雄三氏の『中国基体論』について—」『文明研究』6号 1988年 14頁。
- ³⁵ 佐藤一樹「近代中国研究と「西洋」：ポール・コーエン『知の帝国主義』をめぐって」『中国文化：研究と教育：漢文学会会報』47 1989年 74頁。
- ³⁶ 並木頼寿「コーエン『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』」長崎暢子 山内昌之編『現代アジア論の名著』中央公論社 1992年 35頁。
- ³⁷ 具体的には、章炳麟、譚嗣同、康有為、孫文を指す。
- ³⁸ 溝口雄三「ふたたび近代中国像」をめぐって『史潮』新19号 1986年 25頁。
- ³⁹ 溝口雄三『方法としての中国』東京大学出版会 1989年 59頁。
- ⁴⁰ P・A・コーエン著 佐藤慎一訳『知の帝国主義—オリエンタリズムと中国像』平凡社 1988年 229頁。
- ⁴¹ 同注40 228頁。
- ⁴² 同注40 244頁。

Incompatible Critical Consciousness: *Discovering History in China* and Mizoguchi Yuzo

Wang Jing

In 1976, towards the end of the Cultural Revolution, even scholars previously praising the Revolution could not help feeling disappointed. This disappointment led to the emergence of new methodologies in the research on modern China.

While working as a visiting professor at Berkeley (1979-1981), Sato Shinichi was impressed by how well developed Chinese Studies were in the USA. He translated Paul A. Cohen's *Discovering History in China: American Historical Writing on the Recent Chinese Past*, which was published in 1988. In his afterword, he explains that Cohen was influenced by Said's *Orientalism*, published in 1978. Since Sato had no prior experience with the methodology of Chinese Studies, he was greatly influenced by the book he had translated.

This paper will examine the role Sato Shinichi and Mizoguchi Yuzo played in the China research methodology discussion in Japan in the 1980s. Furthermore, I try to show that although after the translation and publication of the book *Discovering History in China* Cohen and Mizoguchi were thought to be like-minded (both regarding spontaneous change as important), Mizoguchi differed from Cohen in his critical stance towards the issues of superiority and inferiority.